EGGPLANT
ホームスクール通信　エッグプラント
Nファミリー
2010.11.1
No.76

十月に和泉集会に招かれました。日曜日の夜にみなで食事をしたのですが、インドから医療技術の研修のために市大に来ていたクリスチャン医師エビィ兄の送別会も兼ねていました。その席で彼が勤めている病院の紹介をしてくれました。それがとても印象的でした。

その病院はスカダー女史（右下写真）によって建てられました。彼女の父ジョンは、今日世界中で行われている医療伝道の基礎を築いた人でした。一八一九年にセイロン（現スリランカ）に渡り、医療に従事しながら福音を語っていきました。アメリカから連れて行った娘を失い、現地で生まれた子どもも病で失いました。しかし彼らのアジアの人々に対する思いは変わりませんでした。インド南部に移って働きを続けました。インドに行ったアメリカ人医療宣教師の第一号になります。その後さらに八人の子どもに恵まれ、そのうちの一人がスカダー女史でした。彼女は、最初医療伝道には全く興味を抱かなかったそうです。ところがある晩のことです。一人のインド人が家に助けに求めてきました。出産間近の妻の様子がおかしいというのです。女史は父親に任せたかったのですが、カーストの身分制度の厳しいインド社会において男性医師にみてもらうことはできなかったのです。一晩で同じようなことがさらに二件起こり、彼女は為すすべがありませんでした。

知られざる多くの働き

明くる日、心配になってその村に近付くと、鐘の音を聞きました。何と三人とも亡くなったのです。彼女はこのことに大きく心を動かされます。女医になる決心をしたのです。アメリカに渡り、大学に入って九年後資格をとります。その大学で初めての女医誕生だったということです。十年ぶりにインドに戻り、一九〇〇年にベッドが一つだけの診療所を開きました。それが今ではベッド数は二千五百を超え、インドで三本の指に入る有名な病院になったのです。（左下の写真）看護学校や医師を養成する教育機関も持つようになりました。政府の援助を全く受けずに運営されており、その功績を認められて記念切手も発行されたそうです。スカダー女史は、「道端診療所」なる働きも並行して行い、病院まで来れない患者たちのために医師たちが赴いて診療に当たりました。地域の診療所として発展したところもあります。

結局ジョン・スカダーの子どもたち（息子六人と娘二人）は、勉強のためにアメリカに一旦行きましたが、最終的には全員インドに戻り、医療宣教に携わったのです。その後四代にわたるスカダー一族の四十二人が同様な奉仕をし、合計では千百年間分の事業を成し遂げたと言われています。

現在、その病院の医師であるエビィ兄は、病院のある地域にある集会（教会）の責任者でもあります。信者の半分は看護学生だそうです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。」　（ヨハネ十二章二十四節）

同じようなことは日本でも起こったのです。明治期に日本にやってきた宣教師ヘップバーン。日本人はうまく発音できなくて「ヘボン」と言っていました。彼は目薬を作って治療すると同時に福音を伝えていきました。彼が考えたアルファベットによる日本語表記の方法を「ヘボン式ローマ字」と言います。先日お会いした東京のクリスチャンは、彼の曽祖父がヘボンさんから本物の信仰を教えてもらったそうです。

私たちの知らないところで、神に奮い立たせられた聖徒たちが海外へと向かいました。実際に現地の人を助けるために教育や医療の発展に貢献したのです。でも、最も必要なことは「神のことば―聖書」を伝えることだ、ということをしっかり踏まえていました。

J-オイルミルズ神戸工場見学ツアー

E

ホームスクールを応援してくださっているYさんが申し込んでくださって味の素グループ共同企画「J-オイルミルズ神戸工場見学ツアー」に言ってきました。まず初めにVTRで植物油ができるまでの製造工程を見ました。脱色といって色を油の原料の大豆やなたねから色を抜いたり、匂いを抜いたりいろいろな工夫がされていたのが良くわかりました。「J-オイルミルズ」は、なたね油(キャノーラ油)、とうもろこし油(コーン油)、オリーブ油などを作っており、それぞれに特長があってたとえばとうもろこし油は、香ばしい風味があり、揚げた後の保存性が優れていることや脂質は、たんぱく質・炭水化物とならんで三大栄養素としても大きな役割を果していることなども分かりました。

VTRが終った後は、工場をバスで回りました。油は、長期間空気に触れるといやな匂いが出て来たり、品質が劣化したりします。だから製造している時は空気に触れて行けないので、見れたのはボトルに油を入れるところだけでした。少し残念でしたが、油の事が分かってほんとに良かったです。

工場見学の後は、美味しいてんぷらの揚げ方を教えてもらい、作ったてんぷらをみんなで食べました。めっちゃ美味しかったです。

最後には、お土産にJ-オイルミルズのコーン油やオリーブ油なども頂きました。お世話になりました。

こんなことしました！　行事報告

十月

九～十一日　教会で聖書の学び・交わり会（大阪府立少年自然の家）

十九日　合同公文教室・カナダ訪問報告会

二十一日　塗り絵・工作教室「水彩絵の具で描こう②」

二十三日　日曜学校遠足（王寺動物園）

二十六日　お作法教室（フランス刺繍）

社会見学（Jオイルミルズ）

自分で作った弁当です↑

編集後記

秋を飛び越え、いきなり寒くなってきた十月末。朝の早起きもだんだんつらくなってきました。みんな負けるな。

コル・シャロームの音響を通して

M

賛美グループ「コル・シャローム」の音響担当を始めて一年が経ちました。昨年十一月の長野から始まり、これまで幾つもの集会をまわってきました。それまで、音響の経験は全く持っておらず、できることは「音量の上げ下げ」程度。まさに「暗中模索」という言葉がふさわしいスタートでした。(手探りで進んでいる点では今も変わりませんが。)

父たちの賛美は四人揃ってこそ成り立ちます。Hの伴奏も欠かせないものです。(身内が言うのもなんですが)ナマで歌声を聴くと、迫力と良さで心にグッとくるものがあります。けれど、その良さも音響が悪ければ客席には伝わらない。ひたすらダイヤルを回し、ボタンを押す…見た目も役割も「地味」な音響。しかし、それは重要な仕事です。けれども、これはプロの場合の話です。

こちらは、始めて一年の青二才。毎回、何らかの形で失敗があります。もちろん、この仕事は楽しくて仕方がありません。音響関係の勉強ができるだけではなく、「呼ばれて」各地の集会を訪問できるなんて最高！しかし、それ相応の働きをしていない自分を見ると「果たして自分は必要だろうか？」と考えてしまうこともあります。

自分の人生についても同じことが言えると気づきました。神様から与えられたこの人生・この環境・この時間。恵みは十分に与えられているにも関わらず、相応の「使い方」ができていない自分。

そう考えた時、聖書は何と言っているかを思い出しました。「あきらめろ」ではありません。この場所に置かれたのは自分に能力・才能があるからではない。確かに、座る場所はステージの裏側・スポットライトの影の部分。それでも、神様に祈りつつ、自分が今の全力を尽くすとき、そこは神様の素晴らしさを味わえる檜舞台となるのでしょう。この恵みを噛みしめつつ、これからの働きに臨んでいきたいと思いました。